

|||||

書 評

|||||

日本における農業の歴史/松中昭一著/学会出版センター/2002年/318ページ/4,000円

本書は、元本学会会長である松中先生（以後著者と略する）の文字通りの力作である。一般に書評では、その書物の内容の紹介に、簡潔ながら全体に占める比率としてはかなりの字数を割くことが普通であるが、著者ご自身が農薬学会誌の前号（2002年第3号）の談話室欄に「[本著]を上梓して」のタイトルで各章別にかなり詳しく紹介されている。従って、筆者が繰り返すまでもないので、通読したあとの筆者の“印象/感想”をもって書評に代えさせて頂くことをご了承願いたい。

本書にも記述されているとおり日本の“近代的”な農業の歴史はせいぜい第二次大戦後の約50年に過ぎない。従って戦後の農業（学研究）とともに人生を過ごしてきた筆者らの世代のものにとって、本書は、著者が述べられている“20世紀”という“長い”期間より、むしろ現役時代及びそれ以後の間に、“農業及び農業科学の発達が農業技術体系と毒性評価技術や環境保全技術および食品衛生管理の向上に対して、如何に関係し如何に影響を及ぼしてきたか”の総括と、“総括から得られた教訓を近未来においてどのように生かしていくか”の展望に関するわかりやすい解説書としての性格を持っていて共感させられるところが非常に多い。著者は現場（field）での経験を数多くこなしてこられただけに、筆者も関心を持ってはいたものの、深い経緯については未知のままであった事柄、たとえばゴルフ場農薬問題のその後や、無農薬・無合成肥料栽培及び有機農法が全く nonsense であることなどについては、興味深く教えられたところが多かった。

本書では、その全ページ数のうち、ほぼ50%が[農業の研究・開発体制の歴史]というタイトルの第9章に当てられている。そこでは、著者自身が依頼されたアンケートに基づき、国内の大学・国公立試験研究施設・農薬企業をほぼ網羅する農業の研究・開発機関について、その生い立ち・歴史・研究業績・開発商品・将来の研究方針などが“詳しく”記録されている。この章のとりまとめが、本書の著作作業のなかでもっとも苦勞の多かったことを著者ご自身が

前号の談話室欄に述べておられる。大学関係の研究室ごとに過去の研究業績が歴史的に記述され得るには、限定された3編の研究論文の題名だけでは不十分であることについては、著者も述べておられるとおりであるが、「この章の内容が日本の農業の個々の歴史の大部分であるということもできよう」という点に対する期待が十分に実現していないことが残念である。大学の研究室のなかには、著者のアンケートの意図を十分に汲み取っていないところもあるようで、著者のご苦勞を理解することもできる。一方、企業研究機関については概して充実した内容になっており上記の著者のお考えが生かされているものと思う。ただ、ここでは少数ではあるが農薬学会関係の賞に限っても、受賞者名の脱落があり、画龍点睛を欠くことになっているのが惜しまれる。

また、著者が以前に農林省の研究機関に在籍しておられたという経歴からも推察できるところであるが、第9章には日本植物防疫協会や全農をはじめとする各種農業関係団体の沿革・目的・業務内容に関して、アンケートに基づく詳しい解説が含まれている。毒性試験・残留分析・施用技術・普及と施用法指導など、農業の研究・開発と農家・農業者による実用との中間に存在する重要な諸問題を管理・処理するための機関については、大学にこもりがちのことが多く認識不足の筆者にとっては大いに参考になったことを付け加えたい。

農薬学会誌の前号「談話室」欄を参照して頂いた上で、以上述べたように、本書は著者の長い年月にわたる実践的な研究と経験とにもとづいて、ご自身で編纂された農業の“歴史的記録書”である。農業および植物防疫ならびに関連分野の研究者のみならず実務者の座右にそなえるに値する好個の著書として推薦申し上げる次第である。著者は神戸大学と関西大学の教職から退かれた1998年以降、僅か4年のあいだに本著を含め5編の著書を上梓されている。今後そのバイタリティーを保ち、後進のため啓蒙的な解説書を刊行し続けて頂きたいと願うものである。

（京都大学名誉教授 藤田稔夫）